

〔I〕 次の文章を読んで、問いに答えなさい。なお、字数指定のある問いでは、句読点・記号も字数に数える。

どの時代にも、人間の社会にはその時代の関心を反映して、いろいろな標語が<sup>A</sup>掲げられる。たとえば、「自然と人間の共生」、「生態系の調和を乱すな」。

「自然にやさしい」という表現もさまざまな商品に用いられていて、セールス・ポイントにさえなっているようだ。

これらのことばは、いずれももつともで、今、われわれの関心の的である環境問題の解決のためにぜひとも大切な心がまえを示しているようにみえる。

けれどこれらは、どうやら<sup>B</sup>少々古くさい生態学にもとづいた幻想のように思えてくることもあるのだ。

それは、<sup>C</sup>「利己的な遺伝子」という全く別の流行語と関係がある。これは一九九七年度の花博記念コスモス国際賞を受賞したイギリスの動物行動学者リチャード・ドーキンスが創りだしたキャッチ・フレーズで、自然界の生物たちは、すべて「利己的な遺伝子」の<sup>D</sup>サンプルであり、われわれ人間もその例にもれないとする大胆な見方にもとづいている。

テレビなどでもおなじみのおり、この地球上にはさまざまな種の生物がいて、それぞれに異なった、それぞれに<sup>E</sup>巧みな生きかたをしている。これらさまざまな生きものたちは、それぞれがそれぞれの種を維持するために、一生懸命生きているのだと、かつては思われていた。そして、これらの生物たちは、生態系という一つのシステムの中であって、そこには彼らが皆、ともに生きていけるような調和のしくみがあるのだと考えられてきた。

( 1 )、一九七六年に出版された『利己的な遺伝子』(邦訳は紀伊國屋書店刊)でドーキンスが展開した見方は、かつてのこの生物観を根本から覆えしてしまった。

つまり、生きて殖えていこうとしているのは、種でも個体でもなく、遺伝子なのだといふのである。

遺伝子はそれぞれの個体に宿っている。それぞれの個体に宿る<sup>ほくだい</sup>莫大な数の遺伝子の集団は、自分たちが生き残っていけるように、見事なチームワークを組みながら、その個体をつくり、生かし、成長させていく。そしてその個体を「操って」子孫をつくらせる。こうして遺伝子は殖えていく。それぞれの個体はこのような遺伝子の「<sup>F</sup>企み」によって、一生懸命生き、自身自身の子孫をできるだけたくさん後代に残そうと努力する。

それぞれの種の一つ一つの個体がそうやって自分自身の子孫を殖やしていこうとするので、それは当然<sup>G</sup>シエア争いになる。なぜならその種が生きていける条件をそなえた場所は限られているからである。

だとすると、自然はこのような果てしないシェア争いの場であって、けっして調和のとれた場所ではない。このシェア争いに勝った個体の子孫が殖えていき、その結果として種も存続し、進化もおこる。種の存続、種の維持は、かつて考えられていたように目標であったのではなく、個体同士の競争の「(2)」にすぎないのである。

同じ種の中でこのような競争がおこっているばかりではない。異なる種、異なる動物と植物の間にも、このような競争がたえずおこっている。しかしそこには、強弱の問題や、競争のコストの問題があるから、一定のところまで<sup>H</sup>妥協点に達せざるを得ない。この妥協した状態をわれわれが外から見ると、それは一つの「調和」のようにみえる。

われわれはそれを、自然界の調和であり、生態系の調和であると思ってしまうのである。けれど実は、そこには予定された調和はなく、<sup>U</sup>タえざる競争があるにすぎない。

このような見方に立つと、「生態系の調和を乱すな」ということばの意味がわからなくなってくる。本来は存在しない「調和」を乱すも乱さないもないではないか。

「共生」にしてもそうである。共生している二つの生物は、はじめから「お互い仲良く助け合いましょうね」といって「共生」しているわけではない。(3) いつも共生の例にあげられる花と昆虫も、どうやら互いに相手を徹底的に利用して、それぞれ自分の子孫をできるだけたくさん残そうとしているだけらしい。

花はなんとかして昆虫に花粉を運ばせたい。蜜はそのためのやむを得ないコストとして作っている。昆虫は蜜だけ手に入ればよい。花粉なんか運んでやる気はさらさらない。けれど、花のほうが無理やり花粉をくつつけてしまうので、やむなく運ぶことになっているだけだ。そうだとすると、「自然と人間の共生」とは何を意味するのか？

自然が果てしない競争と闘いの場であるなら、「自然にやさしく」というとき、(4) そのどれにやさしくしたらよいのだろうか？<sup>J</sup>どれかにやさしくすれば、その相手には冷たくしていることになる。

このように考えてみると、<sup>K</sup>ぼくが前から主張している「人里<sup>ひとさと</sup>」という概念が、なかなか重要な意味をもっていることがわかってきた。

人里とは、人間が住んでいるところと自然とが接している場所である。人間は生きて活動していくために家を建て、田畑を作る。そのためには自然を破壊せざるを得ない。

家は住んで快適であってほしい。田畑からはよい草や虫を追いだして、作物を作らねばならない。これは人間のロジック(論理)である。自然にやさしくなどしてはいられない。

けれど、その家や田畑のまわりには自然がある。そこでは自然は、自然のロジックに従って、互いに競争しあっている。競争に勝とうとして、人間の家や田畑へ入りこんでくる草木や虫もいるであろう。人間はそれらを、人間のロジックで追いだそうとする。しかし、自然はまた、

自然のロジックで「マ」き返してくる。

このように、人間のロジックと自然のロジックが（ 5 ）場を、ぼくは人里と呼ぶことにしている。こういう人里では、人間は自然のどれかにやさしくしているわけではないが、自然のロジックは自然のロジックのままにさせている。そこに調和はないのだが、人間はあえてそこに調和を作りだそうともせず、あえてかき乱そうともしていない。このような状態が自然と人間の共生なのかもしれないという気がしている。

ぼくが会長をしている日本ホテルの会は、「人里を創ろう」ということを訴えてきた。動物行動学ないし行動生態学の見方に立ってみると、これは意外と的はずれではなかったかもしれない。

（日高敏隆『春の数えかた』より）

問一 傍線 D・I・L のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線 A・E・H の読みをひらがなで書きなさい。

問三 傍線 B 「少々古くさい生態学にもとづいた幻想」とはどのようなことを指しているか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 自然界の生物たちはすべて「利己的な遺伝子」をもっており、人間も例外ではないということ。

イ 地球上にはさまざまな種の生物がいて、それぞれに異なった生きかたをしているということ。

ウ さまざまな生物は、それぞれの種を維持するために、一生懸命生きているということ。

エ 生態系というシステムの中にはさまざまな生物が調和して生きるしくみがあるということ。

オ 遺伝子の集団は自分たちが生き残っていけるように、見事なチームワークを組んでいるということ。

問四 傍線 C に「『利己的な遺伝子』」とあるが、この考え方においてなぜ遺伝子が「利己的」と言われるのか、それをまとめた次の文の空欄（ ）に適する内容を文章中から十文字で探し、記入しなさい。

・ 遺伝子自体が、（ ）から。

問五 空欄（ 1 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア なぜなら    イ しかし    ウ したがって    エ また    オ さらに

問六 傍線F「企み」と明らかに異なる意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 作戦    イ くわだて    ウ 策略    エ 趣向    オ 企図

問七 傍線G「シェア」と同じ意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 占有率    イ 遺伝    ウ 個体数    エ 勢力    オ 生存

問八 空欄（2）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 背景    イ 前提    ウ 結果    エ 志向    オ 目的

問九 空欄（3）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア そして    イ 加えて    ウ たとえば    エ なぜなら    オ けれど

問十 空欄（4）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア まるで    イ かえって    ウ どうやら    エ さすがに    オ いったい

問十一 傍線J「どれかにやさしくすれば、その相手には冷たくしていることになる」のはなぜか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 自然を守ろうとする人間のはたらきかけは、自然の調和を乱すことにつながるから。  
 イ 共生する複数の生物を守ろうとしても、利用される側の生物はずっと利用され続けるから。  
 ウ 自然の中で生きる生物たちを保護しようとすると、かえって競争と闘いを激化させるから。

エ 自然を保護しようとすることは、人間にとって生きづらい環境をつくりかねないから。

オ ある特定の生物を助けると、それと競争する他の生物の邪魔をすることになるから。

問十二 傍線Kに「ぼくが前から主張している『人里』という概念」とあるが、筆者は「人里」ではどのようなことが可能になると考えているか、文章中から八字の語句を探し、記入しなさい。

問十三 空欄（5）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 互いに補い合う    イ 相容れない    ウ 表裏一体である  
 エ せめぎ合っている    オ 協力関係にある



〔Ⅱ〕 次の文章を読んで、問いに答えなさい。なお、字数指定のある問いでは、句読点・記号も字数に数える。

3人の<sup>A</sup>巨匠が、近代建築の歴史を作ったといわれている。その中で最も境界に対して意識的であったのは、3人の中で最も年長のフランク・ロイド・ライトであった。重たく厚い壁を壊し、内部との境界を壊そうと最初に試みたのはライトである。プレーリー・スタイル（草原様式）と呼ばれる、大きな屋根と、大きな開口部を持つ透明な建築によって、ライトは20世紀初頭の建築界に衝撃を与えた。もうひとりの巨匠ミース・ファン・デル・ローエはライトの影響のもとに、ユニバーサル・スペースと名づけられた、さらに透明で壁のない建築を提案した。コルビュジエもまた、ライトの透明性から多くを学び、<sup>注一</sup>近代建築の5原則を宣言したのである。ライトは2人に先行し、全くもって独創的であったが、この独創にも実はヒントがあったのである。そのヒントとは、驚くべきことに、なんと日本の伝統建築だったのである。1893年以前のリイトは、（1）、窓の小さな箱型建築をデザインする、どこにでもいる普通のアメリカの建築家ではなくなった。しかし1893年以降の彼は、<sup>B</sup>突如として普通のアメリカの建築家ではなくなった。ひとつの建築との出会いが、彼を決定的に変えてしまった。1893年、シカゴでコロンブスのアメリカ大陸発見400年を記念する万国博覧会（世界コロンビア博覧会）が開かれた。日本政府はわざわざ日本から<sup>C</sup>ダイクをシカゴに派遣し、平等院鳳凰堂<sup>ほうおう</sup>を模して日本館を建設した。大屋根が作る大きな影の中の、壁のない透明な建築。他のパビリオンは当時アメリカで流行していたギリシャ・ローマ風の重たく荘重なデザインに染め上げられていたが、日本館だけは決定的に異質であった。大きな屋根の下に、開かれた空間が広がる日本館は、庭園と建築とが一体となり、ギリシャ・ローマ風の重たい建築とは決定的に異なる新しい時代の到来を予感させたのである。この建築との出会いによって、ライトは突如として別人になった。それまでの彼をしばっていた、閉じた箱は開放された。彼は大きな屋根を作り、その下に、透明な空間を展開しはじめたのである。それこそがアメリカの大草原にふさわしい建築だとライトは確信した。そのスタイルをプレーリー・スタイルと名づけ、その開かれた建築様式によって、20世紀建築の<sup>D</sup>幕が落とされたのである。ライトは突如として、<sup>E</sup>建築界の<sup>F</sup>カクメイ家として世界にデビューした。

（2）、プレーリー・スタイルは単に開かれているというわけではない。これは、ライトがプレーリーのモデルとした日本の伝統的建築にしろ同じことである。屋根はその下に様々な領域を構成し、様々に微妙な境界を生成する。その屋根の下には、様々なスクリーンが配置され、領域と領域とを微妙に仕切り、つないでいく。境界は消滅するどころではなく、むしろ深化した。そして屋根や庇<sup>ひさし</sup>もそれ自体で、境界を形成する建築的装置であった。壁やスクリーン

のような<sup>F</sup> スイッチョクのエレメントだけでなく、床や屋根といった水平のエレメントも様々な境界を形成するのである。ライトはその技を日本建築から学んだ。様々な種類と強度を持つ境界が、その大きな影の下に生み出されるのである。ライトは開かれた建築を生み出したのと同じ時に、<sup>G</sup> 境界の名人ともなった。

ライトが好んだこの屋根とスクリーンとを、20世紀の建築家や建築史家は、ライトの（3）と見なした。ライトはその片足を19世紀につっこんでいて、それゆえに屋根やスクリーンから抜け出せなかったのだと彼らは批判したのである。

しかし、当のライトはそんなケチな<sup>H</sup> 了見で屋根やスクリーンを用いたわけではない。世界から境界がなくなるわけではないことを、彼ほど理解していた建築家はいない。壁のような乱暴で重たい境界ではなく、格子や障子のような、やわらかな境界、あるいは地面に置かれたひとつの石ころによってほめかされるような繊細な境界で、世界が再構成されるであろうことが、ライトにははっきりと見えていたのである。

それを彼はシカゴの日本館から、<sup>I</sup> 安藤広重の浮世絵から、<sup>J</sup> 岡倉天心の『茶の本』から学んだのである。広重、天心、茶室。それらがライトに示したものは、ひとつの文明の成熟であった。文明の成熟に特有の、成熟した空間であった。広重が浮世絵の中に実現した、境界の重層性にもとづく透明な空間との出会いによって、ライトは西洋の遠近法的空間を超越したといわれる。ルネッサンス以来の西洋の建築と絵画とをしばっていた遠近法による奥行き表現を、彼はついに超越したのだ。シカゴ万博の日本館と同じような衝撃を、広重はライトに与えた。広重が様々なスクリーン（境界）を重ねていくことで空間の奥行きを表現したように、ライトもまたスクリーンで建築物に奥行きを与えていった。

英語で書かれ、アメリカで1906年に出版された『茶の本』も、ライトに圧倒的な影響を与えた。天心は、茶室の本質は、その実体の中にあるわけではなく、その実体の中に生成された空（くう）の中にこそあるのだと、<sup>K</sup> 看破した。ただし、<sup>L</sup> 建築を実体としてとらえるのではなく、その実体の中に生成される空間としてとらえる考え方は、天心の独創ではない。19世紀、ドイツを代表する建築家、ゴットフリート・ゼンパー（1803・1879）は、このような「空」の建築論、すなわち形態的建築観にかわる空間的建築観のパイオニアといわれ、形態的・実体的建築論を否定した彼の考え方の延長に、空間の流動性、透明性をテーマとする近代建築運動がはじまったとされる。（4）、ライト、ミースという系譜の原点はゼンパーの空間的建築論だと近代建築史は整理される。しかしライトは、ゼンパーの理論の影響を受けたというより、天心の『茶の本』から直接的に、空間的な建築表現を獲得したのである。『茶の本』との出会いは、ライトにとって衝撃的であり、彼の人生と作品にとって、シカゴの日本館との出会いと同じように、広重との出会いと同じように（5）であった。彼自身こう記している。

「その（茶の本）中に私は次の文を見つけた。建物の全体は4つの壁と屋根にあるのではなく、生活する空間に存在するのである！ 私は船の帆<sup>K</sup>が下りるように座り込んだ。いったい、なぜ—キリストよりも500年も前の—老子<sup>注二</sup>なのであろう。これからどうすればよいのだろう。ここからどこに行けばよいのだろう。本を切り刻んでしまうことはできなかった。つまり、それを隠すことができないことはわかっていた。Lこのいまましいものが世に出るべきであることを知っていたのだ」（1954年のオクラホマ大学のレクチャーより）。

茶室の基本原理ともいえる空間的建築観が、直接的に彼の建築を生み出し、彼が創始した近代建築の引き金となったことを、晩年のライトはあまりにも正直に告白しているのである。

（隈研吾 高井潔『境界』所収 隈研吾「日本的な『関係性の建築』の時代へ」より）

注一 近代建築の5原則 コルビュジエによって提唱された新しい建築のための五つの要素。ピロティ（一階部分を柱のみ残す）、屋上庭園、自由な平面、水平連続窓、自由なファサード（建物の正面部分のデザイン）からなる。

注二 老子 『老子』第十一章に、家の有用性はその内部の「何も無い空間」にこそあると言う。

問一 傍線C・E・Fのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線A・B・Kの読みをひらがなで書きなさい。

問三 空欄（1）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア ごくありきたりの イ たぐいまれな ウ 耳目を集める

エ 並はずれた オ 人の不興を買う

問四 傍線D「幕が落とされた」と明らかに異なる意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 口火が切られた イ スタートが切られた ウ 幕開けとなった

エ 幕を下ろした オ 火蓋が切られた

問五 空欄（2）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア たとえば イ なぜなら ウ それに対して エ したがって  
オ ただし

問六 傍線Gの「境界の名人」とはどういうことか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 建築から壁を取り除き、内部との境界を壊す人。
- イ 様々な境界を利用して建物に奥行きを与えられる人。
- ウ 壁やスクリーンによって新たな境界を生み出す人。
- エ 格子や障子といった日本建築の特徴を熟知した人。
- オ 境界の重層性によって遠近法的に空間を表現する人。

問七 空欄（3）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 多面性
- イ 後進性
- ウ 現代性
- エ 先見性
- オ 独自性

問八 傍線H「了見」と明らかに異なる意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 思案
- イ 心づもり
- ウ 当惑
- エ 思慮
- オ 意図

問九 傍線I「看破した」と同じ意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 予測した
- イ 主張した
- ウ 見抜いた
- エ 思いめぐらした
- オ かえりみた

問十 傍線Jに「建築を实体としてとらえるのではなく、その実体の中に生成される空間としてとらえる考え方」とあるが、文章中からこのような建築のとらえ方を示した六字の語句を探し、記入しなさい。

問十一 空欄（4）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア さらに
- イ ただし
- ウ たとえば
- エ しかし
- オ すなわち

問十二 空欄（5）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 致命的
- イ 決定的
- ウ 必然的
- エ 肯定的
- オ 模範的



問十三 傍線Lに「このいまましいもの」とあるが、ライトがこのような言い方をしたの

はなぜか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 当時の西洋の建築理論からすればかばかしい考え方が展開されていたから。
- イ すばらしい建築理論を述べたものがアメリカではなく日本のものだったから。
- ウ 茶室の建築理論の根拠が西洋のキリスト教ではなく東洋の老子にあったから。
- エ 自分の従来の建築理論を完全に否定する理論を発見してしまったから。
- オ 本で述べられる建築理論がすべて日本の建築に特化したものだったから。

国語

解答用紙一

[I]

問十三	問十二	問十一	問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
											A	D
											げ	
											E	I
											み	え
											H	L
												き

受験番号	
------	--



〔Ⅱ〕

国語

解答用紙二

問十三	問十二	問十一	問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
											A	C
											B	E
											K	F

受験番号	
------	--

